

「ママさんバレー」の実態と意義

内 海 和 雄

はじめに…本研究の位置づけと狙い

「ママさんバレー」、正式には「家庭婦人バレーボール」とは主婦たちのバレーボールを意味する。近年はバレー労働も含めると八割以上の就業率を持つが、これまでに諸制約の下で社会的参加や社会的自立の遅れている階層と言われ、同様に社会的諸権利が薄く「社会的弱者」の範疇に置かれてきた。その内でも二〇代後半から四〇歳代の子育て真っ最中の主婦が、福祉政策に於いて最も後進的と言われるスポーツにいかに関わっているかを把握することは、社会とスポーツとの関連の一つの形態を示すものである。

全国家庭婦人バレーボール連盟の活動は、世界でも他に類が無く、その特異な活動とその持つ意義についての

社会科学的な検討は、現代社会の解明の手掛かりとなる。家庭婦人バレーボールに関する研究はこれまで殆ど皆無であり、スポーツ社会学の大きなテーマとして注目される必要がある。

一 家庭婦人バレーボール大会

1 歴史と変遷

一九六四年の東京オリンピック、日本国内での女子バレーボールの人気は大変なもので、優勝候補の日本（日紡貝塚チームを中心とするチーム。当時その強さは「東洋の魔女」として世界で「恐れ」られた。）は前評判に違わず、宿敵ソ連を破って見事に金メダルを獲得した。

以降、高まる主婦のバレーボール参加要求を背景に、

企業からの援助申し入れもあり、(財)日本バレーボール協会と朝日新聞が主催し、文部省と日本体育協会、都道府県教育長協議会、全国体育指導委員協議会が後援となり、そしてブラザー工業、ヤクルトが協賛して、一九七〇年に第一回全国家庭婦人バレーボール大会が東京駒沢体育館で開催された。大会に先立って、一九六八年、東京都家庭婦人バレーボール連盟が設立された。

それらの基盤として、戦後の学校体育(体育科教育と部活動)におけるバレーボールの学習経験の増大があり、六〇年代以降の国民の、そして女性のスポーツ参加要求の増大があった。

家庭婦人を対象とするスポーツ大会は世界でも珍しく、また、オリンピック開催をきっかけとしたバレーボールブームから誕生したこともあり、ブランドジェイIOC会長も「オリンピックムーブメントの生きた見本」として賞賛した。世界バレーボール連盟も、世界唯一のこの大会を注目している。

一九七〇年の第一〇回大会と続く一一回大会では(財)東京都バレーボール協会と東京都家庭婦人バレーボール連盟が主管として参加し、そして一九八二年の第

一三回大会より全国家庭婦人バレーボール連盟も主催者として加わり現在に至っている。

2 大会の特徴

選手中心の競技大会でなく、広く参加することを理念とした。それは大会の運営にも生かされた。第一回大会は四月に行われたが、農繁期などと重複するため、第二回からは七月下旬から八月月上旬に行われている。これにより、応援団も子ども、夫などの家族が多数参加できるようにになった。大会の特徴として以下の点が考えられる。

① 第一に、チャンピオンを創らないということ。つまり全国四七都道府県からの四九チーム(東京は第一回から、北海道は第一〇回からそれぞれ開催地と広域性から二チーム参加)を四つのグループに分け、その範囲で各チームに三試合を保障しながら、優秀チームを選択する。そしてその優秀チームの内、平均年齢の最も高いチームに総理大臣賞(第二回より)を与えている。因みに大会の平均年齢は三五歳前後であり、第一二回大会以降の総理大臣賞チームは平均年齢三五歳以上であり、過去五年間では三七歳から三八歳とアップしている。

② 高度化との矛盾。第一三回(一九八二)あたりから

(3) 「ママさんバレー」の実態と意義

元オリンピック経験者、実業団経験者も多く参加するようになり、競技水準が上昇するようになった。この影響は、第一五回以降、これまで平均年齢の最も高いチームに与えられてきた総理大臣杯が、優秀4チームのトーナメントによる優勝チームに与えられることになった。さらに第一六回(一九八五年)大会からはNHKが後援団体に加わり、最終日の総理大臣杯の模様が全国中継されることになり、高度化がいつそう進行した。ここに、ママさんバレー大会における大衆化と高度化の矛盾が内包され、理念の一定の手直しが迫られた。このことは、かつてトップを極めた女性たちが再び主婦としてバレーボールを享受しているという事実と同時に、「一時期見られた、いわゆるママさん大会らしい雰囲気というものが少な」くなって行くことも一方での事実であった。

③全国大会には一度出たら再度プレーヤーとしては出られない。(これは第六回から決定された。出た人は指導者として期待される。)出場資格は二五歳以上の家庭婦人であるが、過去全日本レベルの大会に出たことのある人は、三五歳以上からの資格となる。メンバーも第二回から同一小・中学校区(県によっては同一自治体)居

住者に限定された。

全国大会へ参加するために、時には過熱する場合もあるようだが、そこは一定の人生経験者であり、現役の主婦でもあることから、あまり大きなことにはなっていない。

④現役の子育て中の主婦が多く、中には乳児を抱えての参加者もいる。会場に「子ども預かり所」を設置したり、試合中子どもが愚図ってプレー中の母親にかじり付いたり、婦人大会ならではの微笑ましいハプニングも多い。応援団には子ども、夫も多く、大会参加に四〇五日家を空ける主婦たちは、宿舎に帰れば毎日家への電話が必須である。家から離れてほっとすると同時に、家を心配する両面を抱えながらの参加である。主婦の日頃の頑張りは子どもや夫を含む家族関係にも多くの大切な役割を果たしている。こうした意味からも、家庭婦人バレーボールの意義が、単にスポーツの普及ばかりでなく、子育て論、家族論、地域論あるいは女性の社会的参加、ジェンダー論としても多くの教訓を内包している。

3 参加チーム数の変動

六四年のオリンピックを挟んで、ママさんバレーボー

ルは地域自治体の体育祭の行事などで開催され、また少しずつ自主的なクラブも結成され始めていたが、それらはどちらかと言えばまだ散発的なもので、ルールも場所によって異なっていた。それらが、この大会で統一化されることになる。

さて、全国家庭婦人バレーボール大会の地区予選の参加チーム数の動向(図1)を、スポーツへの家計の支出の動向(図2)や国民の一般的なスポーツ参加の動向(図3)と大まかに比較してみたい。(尚、この三者の内的なあるいは直接的な関連については現時点では実証できない。)

発足した七〇年には八五五チームが一〇年後の七九年には五二三〇チームへと、六倍に伸びた。一九七五年当時、全国のママさんバレーボールチーム数は三万とも五万とも言われるほどに急増期であった。七〇年代の国民の家計に占めるスポーツ支出は図2のように、七〇年の年間約四〇〇〇円から七九年の約一六、〇〇〇円と四倍に伸びている。その内実は主にスポーツ用品である。七〇年代は、特に七三年を政府自身も「福祉元年」と銘打ち、一定の福祉振興を行った時期であり、これに伴って

国民のスポーツ参加要求も急速に高まったが、ママさんバレーの伸展率も急速であった。

広報としての朝日新聞の役割も大きいと考えられる。これは甲子園夏の大会が朝日新聞の後援であるが、新聞社として家庭婦人バレーボールの発展を見込んでのことである。

しかし、八〇年代の参加は図1のようにほぼ横這い状態が続いた。これは、内的には全国大会のレベルの高さと、一〇年に及ぶ年月の間にチーム内の四〇代、五〇代の選手が多くなり、「楽しみとコミュニケーションのバレーに徹し、全国大会は諦める」というチームも増えてきているのではないかと分析されている。国民全般のスポーツ参加が図3のように、八〇年代は大きく低下していたことから比べると、むしろ良く耐えたといえるだろう。八〇年代は景気の停滞があり、職場では「過労死」が大きく問題化されたように、「サービス残業」が厳しかった。しかし、スポーツ参加数としては減少したが、家計のスポーツへの支出は上昇した。統計の取り方が七〇年代と少し異なったようだが、図2のように八一年の約三四、〇〇〇円から九〇年の約五八、〇〇〇円と

(5) 「ママさんバレー」の実態と意義

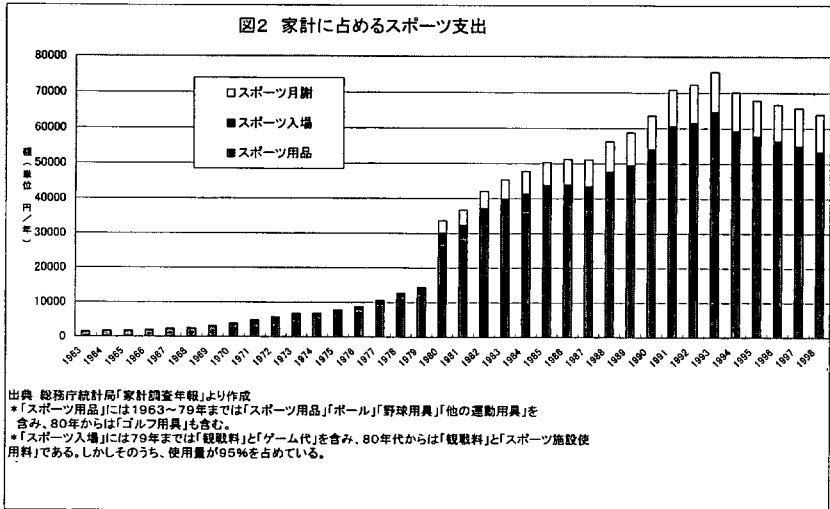
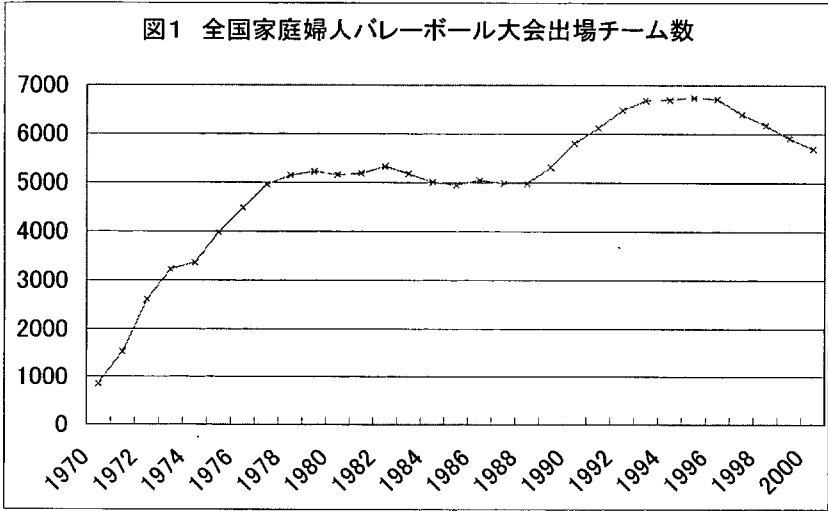
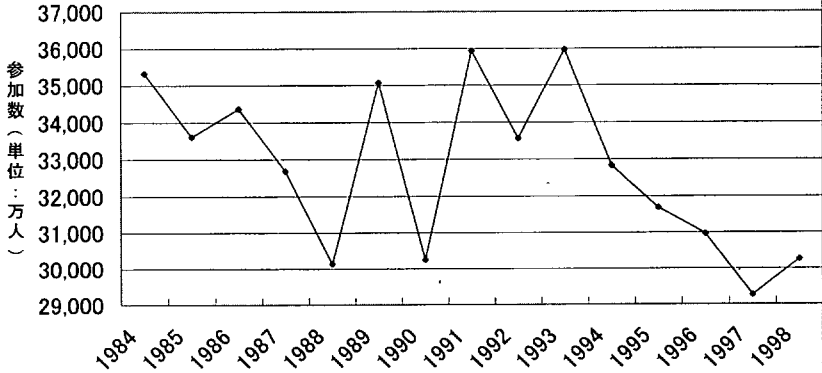


図3 国民のスポーツ参加



出典「レジャー白書」余暇開発センター、1984~1998年より作成

一・七倍に伸びた。

そして九〇年代から現在までの参加チーム数を見ると(図1)、バブル経済の中頃の八九年の五三〇四から再び上昇し、九五年の六七四〇チーム、全国で一〇万人以上のママさんが参加した。しかし九六年以降はバブル経済の崩壊後の長引く不況による家計への直撃が、地域スポーツ参加の減少をもたらした。と同時に、このバレーボール大会への参加数も減少させたと考えられる。二〇〇〇年の五六八八、つまり九五年の八四%までに減少しつつある。九〇年代後半の産業空洞化を伴う不況は深刻で、図2のように九四年の約七六、〇〇〇円から九九年の六四、〇〇〇円へと、八四%まで落ちてきている。その内訳で見ると、「月謝」や「入場料」はむしろ九五年以降も多少拡大したにもかかわらず、「用品」だけが大きく落ち込んだ。そして図3のように、九〇年代に入って上昇してきた国民のスポーツ参加数が、九四年の年間三億五千万人から九七年には二億九千万人と、八三%まで減少させている。こうしてみると、九〇年代のママさんバレーへの参加チーム数の低下は上記の要因と軌を一にしていることが分かる。

(7) 「ママさんバレー」の実態と意義

それと同時に、九〇年代のバレーボールムードの今一つ盛り上がりには欠けたことも原因の一つになるだろう。一九六四年以来オリンピックに一貫して参加してきた日本の男女バレーボールチームが、二〇〇〇年のシドニーオリンピックで初めて出場権を失った。この背後にはバブル経済崩壊以降の、実業団バレーボールの停滞、その象徴として、日本の女子バレーボール界をリードしてきた「ユニチカ(旧日紡貝塚)」の解散、「日立武蔵」の解散予定など、バレーボール界の全体的な停滞によるバレーボールムードの停滞も影響しているかも知れない。リーグに倣って一九九四年にVリーグが発足したが、こうした背景の元で、バレーボールブームを再び引き起こすことは出来なかった。

二 家庭婦人バレーボール連盟の組織と活動

1 全国連盟の組織・事業

① 組織

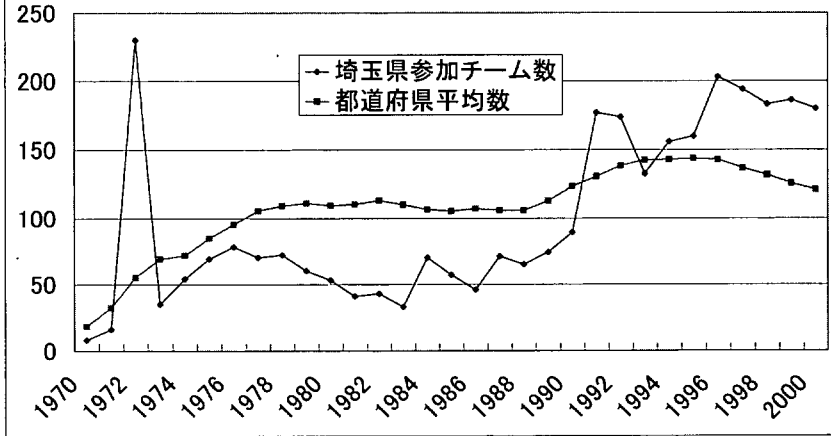
現在、全国組織として、会長(一)、副会長(三)、理事長(二)、副理事長(二)、常任理事(四)、理事(四)、監事(二)から構成されている。

組織としては全国四七都道府県連盟があり、そこからの上納金で連盟の基本財政はまかなわれている。

② 事業

先ず、一九七〇年以來の全国大会がある。一九八八年には五〇歳以上の全国シニアはまなす大会(小樽)が開かれ、翌年八九年には第一回「全国家庭婦人バレーボールいそじ大会」(五〇歳以上の大会)が全国大会の第二〇回を記念して開催され、現在に続いている。その年、広報誌「いそじ」(年刊)が発行された。一九九五年には親善交流大会(六〇歳以上)が開催された。ここでは「ボールは小学生用の軽量四号、サーブは一本、一セット中にベンチにいるプレーヤーを全員交代させる」というルールが採用された。これは翌九六年に第一回「全国家庭婦人バレーボールことぶき大会」(六〇歳以上)として発足し現在に至っている。翌年二月には広報誌「ことぶき」が発行された。この「いそじ大会」と「ことぶき」大会の発足は明らかに「本大会」のOGによるものであるが、それ自体は、女性のスポーツ参加、社会参加の継続、広がりを示すものでもある。その他大会としては、一九九六年からブロック大会も始まった。

図4 家庭婦人バレーボール参加実態(埼玉県)



七九年の全国家庭婦人バレーボール連盟の発足に伴い、機関誌『明るい輪』が広報紙として発刊された。

「女性の大会であるから運営は女性の手で」という理念に基づき、徐々に女性主導へと移行していった。一九七四年には女性審判員が登場し、七五年には、大型のバレーボール教室も開催された。七九年に全国連盟が結成されてからは、審判講習会が大きく伸展した。八一年より審判講習会が各地を回り活発に行われ、自前の審判養成を促進した。これ以降、審判講習会は大きな事業となっていた。八九年からはブロック別のリーダー研修会ももたれ、各地でのリーダー養成が図られ始めた。

2 地方(埼玉県)連盟

(1) 県連盟

① 組織・財政

埼玉県家庭婦人バレーボール連盟の事務局は理事長・渡辺幸子氏の私邸にある。県レベルの事務局は独立した事務所を借りる規模にはなく、こうして私邸に置かれる場合が多い。

埼玉県の全国大会出場予選の参加チーム数は図4のよう、七〇年代から八〇年代は全都道府県平均を大きく

(9) 「ママさんバレー」の実態と意義

下回っていた。つまり八〇年代の平均参加数が一一〇前後で推移した一方で、埼玉県は八四年には六〇台に落ち込んでいる。これは全体の割合からすれば、〇・六％と極めて低い。しかしその後徐々に上昇を遂げ、九二年になると都道府県平均を上回るようになり、二〇〇〇年には全体の三・二％を占めるまでになっている。しかし人口比からみれば、埼玉県の家庭婦人のバレーボールの潜在的要求はもっと高いと考えられる。

九〇年代後半から全国総数の参加数の低下と同様に埼玉県でも低下している。

こうした、埼玉県の動向とその背景の分析は殆ど成されていないが、いくつかの推測は成り立つ。それは、①埼玉県は一貫した人口流入地域であり新興地区が多いため、十分な主婦の参加が得られないこと、同時に家計に占める主婦の収入の役割が大きいため、相対的に主婦の参加が低いこと等、新興地域の「貧困さ」の反映が考えられる。②しかし、一方でその分、人口に占める中年層の割合が大きく、参加への潜在的な要求は大きいと考えられる。それが九〇年代の急上昇をもたらしたのではない。③埼玉県内の自治体のスポーツ施設、スポーツ施

策状況は(も)、相対的に貧困であるが、これの影響も考えられる。④家庭婦人バレーボールの普及施策状況等との関連が考えられるが、未解明である。

県連盟への登録は、同一市町村在住者を基礎とするチームが登録される。年間登録費は一チーム四〇〇〇円であり、因みに二〇〇〇年度の登録は二三チームである。大会参加費は一チーム三〇〇〇円で、二〇〇〇年度の春の全国大会予選は一八〇チーム(登録チーム数の八一％)の参加である。

全国大会のみ全国連盟から参加補助として二〇万円支給されるが、その他、県内大会には後援・賛助企業から大会費の約半分くらいが援助されている。その他、県の補助は無く、会場確保も、各体育館の調整会議が終わった後、空いているところを探しているのが実態である。施設の貧困さがこうして反映している。

財政運営から見てもかなり厳しい実態である。従って、大会の運営なども、役員の「日当・交通費込」は一〇〇〇円であり、弁当、交通費を含めれば完全に持ち出しであり、同じ役員でも選手を兼ねての参加の場合にはそれも支給されない。殆どボランティアで支えられているの

が実態である。

因みに、登録チームと、地域での総チームの実態で見ると、例えば、埼玉県上尾市の場合、登録は八だが、未登録チームは四二あり、総数で五〇チームくらいである。場所によっては未登録チーム数は登録数の一〇倍くらいあると推測される。これら地域でのチームの八割程度は小学校の体育館の学校開放(夜、土日)使用であり、その他は市の体育館(昼間)などであり、殆どが社会体育の一環として、公共施設で行われている。

県大会としては、春の大会(全国大会予選)、関東大会予選、いそじ大会、ことぶき大会、知事杯(県を、東西南北、秩父、児玉の六地区に分けて)行っている。

事業として、県を東西南北に分け、それぞれの講習会を行っている。

(2) 地域チーム…「浦和市さつき会」

①設立

一九六四年の東京オリンピックにおける「東洋の魔女」の影響は大きかった。浦和市でも六九年に教育委員会主催の家庭婦人バレーボール教室(八週間)が開催され、七四名の参加者を得た。その人たちが中心となり、

教育委員会の支援、優れた指導者を得て、同年にさつき会が設立された。初代理事長の吉川要子氏はかつては自らも実業団で活躍した方であるが、さつき会の創立を担い、指導者としてプレーしてさつき会のレベルを高めた。現在、現役を退いているが県市のスポーツ発展の要職で日々奮闘されている。

八〇年頃には会員が七〇名を数えている。既に実力は県内ではトップクラスに躍り出ており、全国大会にも出場している。

七〇年当時、浦和市にはPTAを中心にしてせいぜい五、六チームにすぎなかったが、八〇年当時は約三〇チームに増加した。「浦和市さつき会」に参加する会員はそれぞれ地域のチームの会員であり、またそこでのリーダー的存在である。こうした構造は当時から現在にも継統されており、さつき会は地域家庭婦人バレーボールの高度化の象徴でもある。八〇年当時、全国大会への練習は特別練習は夜七時頃からであり、主婦との両立でも苦勞をしていた。

八三年にはさつき会等が中心となり、「浦和市家庭婦人バレーボール連盟」が設立された。市連盟の行事とし

(11) 「ママさんバレー」の実態と意義

て、学区毎のチーム編成をとり、体協会長杯大会、教委主催大会、本連盟会長杯、四〇歳以上のシニア大会、三市親善スポーツ大会、体育祭行事、派遣事業、実技講習会、審判講習会等を行っている。

② 会員

現在五三名であり、年齢構成は三〇歳代が一名、四〇歳代が一九名、五〇歳代が一七名、六〇歳代が六名である。現役は最年少三〇歳、最高齢六七歳であり、創立以来の現役が一人。平均年齢は四〇歳代である。

③ 練習・試合

現在金曜日の午前に市民体育館のバレーボールコート三面を使用して練習している。一九九九年の全国家庭婦人バレーボール大会では優勝し、全国の頂点に立った。

試合は県大会（春秋）が二回、市内大会三回、それに「いそじ大会」と「ことぶき大会」がある。さらに、八つの招待試合がある。さつき会の会員は地域チームでの週一〜二回の練習もあり、そこでの試合もあるから、練習量ばかりでなく、日程上もかなりの時間数を割かれることになる。さらに役員や二〇人いる審判資格者は、諸大会にも動員が掛かるから、シーズンの土日は殆ど「出

ずっぱり」に近い状態となる。「家族の理解と支えがなければ出来ない」、とは皆さん口をそろえて言うことである。

④ 組織・運営・行事

会長、副会長、会計、書記、会計監査で会長・副会長は二年任期で会員の選挙で選ばれる。練習の内容は「強化部」で検討されるが、現会長の黒沢嘉枝氏はかつて国際試合も多く経験した名選手である。

県レベルの大会では男性はベンチに入れないが、市レベルの大会では男性が入るチームもある。家庭婦人バレーボールの普及向上に男性の援助が果たしてきた、そして果たしている役割は大きいが、家庭婦人の自立という点から、男性のベンチ入りは市レベルでも懸案事項である。

会の行事としては、日々の練習、試合の他に、講習会や審判参加、或いは会員相互の親睦のための新年会や年一回の研修旅行がある。それに、収入も兼ねたバザーである。

⑤ 財政

会の収入としては月一〇〇〇〇円の会費が主であり、あ

とは元会員を中心とする賛助会員としての会費、バザーくらいである。

⑥家族

さつき会の退会は余り多くなく、また特別な勧誘もしないが、自然と加入してくるようである。地域レベルでのチーム退会理由として、「仕事を始めたので」「体力的にもたない」「夫の反対」「怪我で家庭への影響」「土日は外に出にくい」「親の介護」等がある。それらはどれか一つというよりも、複合的である場合が多いであろう。いずれにしても主婦としての立場との矛盾である。彼女たちの活動には家族特に夫の理解は不可欠である。この点で夫自身のスポーツ参加率は、それ程高くないはないようである。そして「さつき会には離婚がない」という。これは夫の理解もあるが、その前提として、彼女たちが「いろいろな言われたくない」ために「家事を手際よく済ませて参加している」合理的な人が多い。彼女たちは、地域のチームへの参加と同時に、PTA活動などへの参加も多く、活発な生活態度が伺える。

その上に、彼女たちの九割の人が仕事と両立させていることも驚きである。

⑦見学の感想

六人制コートを使用し、ネットの高さは二、〇五メートルである。全体に守備練習がより重点的であった。これは年齢的に対応したものであるからかもしれない。とはいえ、先の年齢からの推測とはおよそかけ離れた機敏さと技術力であった。

練習内容とその密度はかなり高く、「強化部」での検討と、会員の消化の高さを感じた。もちろんこの中には現会長の黒沢嘉枝氏の知見が相当に反映されているであろう。今全国の家庭婦人バレーボールは彼女と同様な人たちの多くに支えられている。そうした彼女から見れば、会員の行動は時には歯がゆいことも多いに違いない。しかし、かなり密度の濃い練習の間、怒鳴り声が全くなく、実質二時間という貴重な時間を極めて効率よく、はつらつとして練習する会員の姿が印象的であった。(今でも時折見受ける「怒鳴り」は男性の愚行なのかも知れない。)練習後、体育館のロビーで卵の「販売」をしていたが、主婦のチームらしさの一端を感じるものであった。会員の多くはこうした練習の中で、ストレスを発散させるが、会長の黒沢氏は「ストレスがたまると笑いな

(13) 「ママさんバレー」の実態と意義

から話していたが、本音の一面もあろう。日常的な業務、練習における指導、時には人間関係の修復など、そして試合に臨めば、常勝を期待されるチームにあってはまだ、「勝ちを目指すのか、参加重視なのか」で選手起用の細かい点にまで気配りする必要があるからである。

三 「ママさんバレー」の意義

一九九七年度時点の連盟への加盟チーム数は九五三二であり、全国大会への参加は六四〇二（六七％）であるが、これに未加盟チームが全国で一三、二七三と推測されている。大会出場は全国大会の場合選手一二名、監督、コーチ三名で、合計一五名である。従って、（九五三二＋一三、二七三）×一五＝三四二二、〇七五となる。つまり、三五万人ぐらいの家庭婦人バレーボール愛好者がいると推測されるが、主婦とスポーツとの関連をその意義をこれまでのスポーツ社会学の枠組みから考えると、大まかには次のように捉えられる。

① スポーツ文化の享受…これはスポーツを楽しむ人の教養の問題である。特に子育て中の主婦、また家計の圧迫を最も強く受ける主婦が自らの教養娯楽に割ける時間

と費用は直撃される。この点で、ママさんバレーに参加することは、バレーボールという教養を身につけることによる人格的高揚がもたらされる。

② 健康づくりの推進…出産による身体へのハンディは大きなものである。また、妊娠後体重が戻らず、そのまま肥満に移行する人もいるが、家事、育児、そして仕事に追われる人々にとって、心身の健康づくりは極めて大切である。その点でママさんバレーの役割は大きい。

③ 円満な家庭…主婦は家庭の中心にいて、家庭の明るさを維持する。主婦の機嫌一つで家庭の雰囲気が大きく決定されるのも事実である。こうした点で、①②を基礎とした上で、この家庭の円満さが、ママさんバレーの意義として極めて大きいと考えられる。

④ 良好なコミュニティの形成…主婦にとっての地域の多くは子育てを通してのものが大半であるが、主婦自らの「趣味」による繋がりは、子育てとは違う新たな人間関係であり、新たなコミュニティの形成である。

⑤ 地域の活性化…と同時に、それは地域の活性化の基盤を形成している。市民大会、市民運動会等で、主婦の参加はその地区の活性化の指標ともなる。

⑥地域レベルの国内・国際交流の推進…スポーツは全国、万国「共通語」であり、初対面の人たちでもすぐには理解できることが出来る。従って、地域交流、国際交流にはスポーツは欠かせない。

四 課題

①女性の社会参加

女性の有職率は年々高くなっている。これは国際的動向であると同時に、歴史的動向でもある。そして女性の社会参加の意義を指摘し、女性の権利拡大を主張するジェンダー論も高まっている。こうした中で、単なる有職者というだけでなく、家庭に帰れば育児、家事をも全面的に負担せざるを得ない主婦のスポーツ参加は、一般女性のスポーツ参加以上に、それらの諸制約を克服してのものであるだけに、いっそうその意義も深いものと考えられる。この点で、ジェンダー論、女性論からいっそう注目される必要がある。

②加齢とスポーツ

バレーボールチームとしておおよそ一〇年でメンバー交代がある。その後「いそじ大会」や「ことぶき大会」

への参加もあるが、多くの人は他種目へ移行してバレーボールから離れるか、スポーツ界から去っている。前者自体は社会全体としては悪くはないが、既存の人間関係、社会関係を維持しながらスポーツに参加するうえで、「いそじ大会」「ことぶき大会」のようなシニアの大会がもっと普及することが求められる。それと同時に、バレーボールの本質を失わずに、しかも高齢者でも参加できるように工夫がいっそう求められる。スポーツとは、歴史的に見れば、成人男性を対象として生まれ、享受されてきた文化であるから、それらを子ども、女性、高齢者が享受する場合には、既存の「男性ルール」に縛られることなく、もっと大胆に改革する必要がある。

③家計と家庭婦人スポーツ

当然、家庭婦人バレーボールに参加している人々の有職率も高い。それ故に仕事、家事・育児との時間的兼ね合いが課題となっている。また、特に九〇年代後半の長期不況の中での家計の圧迫は、既述のようにスポーツ全般の参加低下をもたらしているが、これは家庭婦人バレーボール参加でも例外ではない。いやむしろ、家庭婦人の余暇、趣味は家計の影響を最も強く受けると推測され

(15) 「ママさんバレー」の実態と意義

る。こうした時間的、経済的負担をいかにしたら軽減できるのか、公共的支援も含めて検討する必要がある。これらを単に個人の問題とせず、もっと社会的課題として把握する必要がある。参加数の低下の背後には皆さんの参加希望の声が存在しており、そうした人々の参加をいかにして叶えることが出来るかが、課題となっている。

④大衆化（普及・発展）と高度化

県によって、参加チームの多い所と少ない所があり、全国大会への各県からの参加数にも不満はある。因みに二〇〇〇年の第三一回の都道府県別の参加チーム数を見ると、最も多いのは東京都の五一七で、最も少ないのは山口県の一七である。東京は開催地のため二チーム参加だが、山口県の一七分の一と比べて約二五九分の一であり、その差は一五倍である。国会議員選出も三倍も差があれば憲法違反が問われる中で、この差は大きすぎるとの指摘も一理ある。因みに二〇〇〇年の参加総数五六八八チームを四七都道府県で割ると、一県平均二二一チームであるが（図4）、四七都道府県の内、九九チーム以下は二八で、一〇〇台が一三であり、二〇〇台が三、そ

して三〇〇台以上が神奈川の三六七、大阪の四二六そして東京の五一七である。全国大会の在り方が問われている。

女性の婚姻形態も変わり、いわゆる「家庭婦人」「ママさん」は独身女性を排除しており、「差別」だとの発言も出ている。それだけ、女性の参加要求が強まった結果であろう。参加資格も問われている。

さらに、若い頃全日本レベルの大会に参加したような人々は三五歳以降に参加可能となっているが、彼女たちからすれば同じ家庭婦人として、二五歳からの一〇年間で不当に排除されているとして、そうした規定の廃止を求める声も出ている。こうなると、すべてのスポーツ種目が必然的に抱える「大衆化と高度化の矛盾」をママさんバレーも抱えることになる。第一五回大会以降の優勝チームの創出は、この点での一つの改革である。スポーツはその競技性という本質上、高度化は不可避である。その点で、七〇年からの一四回までは大衆化の理念が勝っていたが、一五回以降はそれに高度化への要求が加えられたことによる。スポーツの普及の上で、これは単一のクラブ、チームレベルに於いても、全国的組織に於い

ても抱える必然的な矛盾であり、その統一的な発展が求められる。

⑤ 家庭論とママさんバレー

夫の理解は以前よりは容易になった。これは上記のとがより一般化されてきたからである。第七回(一九七六年)に、朝日新聞社の呼びかけでママさんバレーのキヤッチフレーズが公募され、四三七四通の中から「家ぐるみ ママのバレーで明るい輪」が最優秀作品となった。この内容はママさんバレーの家庭がスローガン化されている。

八〇年代以上に九〇年代以降の家庭は管理家庭(受験で子どもの全生活、全人格を管理する)と放任家庭(育児放棄)が増加し、その中で正常家庭の多くが動揺している。管理家庭、放任家庭に共通することは、子どもたちに愛情が与えられておらず、それゆえに子どもに自己確信が育っていないこと、また、基本的な生活習慣や市民的な道徳がしっかりと躡けられていないことである。こうしたことが九〇年代以降の子どもの孤独感、不安感を増幅させ、人間関係の希薄化を生んでいる。それによって凶悪犯罪に一気に突入したり、学級崩壊の背景を形成

している。

こうした家庭状況の中で、ママさんバレーに参加している家庭は、正常家庭の典型を作り出し、これによって、子どもと親との関係、夫婦の関係、コミュニケーションがかなり正常に維持されているのではないかと推測できる。がんばっている母親の姿は、子どもへの強い励ましとなるのではないか。あるいは頑張っている美しく健康で、性格が明るくなった妻をみれば、家を空けることに愚痴をこぼしてきた夫の協力も増えるのではないか。全国大会出場へ向けて、出産計画を一年ずらしている人もいるというが、これなどは夫の協力なしにはあり得ないことである。

⑥ 参加できなかった人々

参加している人々は以上のような機能を維持しているが、それでは途中で止めざるを得なかった人々の理由は何なのか。「好きでなかった」「体力がもたない」「人間関係がうまく行かなかった」「家族の支持が得られなかった」「経済的に継続できなかった」等が考えられる。中には、「レベルが高すぎた」など、参加意識はあるが、自分のレベルに適應できるチーム、クラブに出会えない

場合もある。これらに地域でどのように対応すればよいのか。これは個々のチーム、クラブの課題であると同時に、自治体のスポーツ政策としても考えるべき課題である。

⑦ 「ママさんバレー」の公共性と公的援助

本来公共性を持つスポーツ文化の地域的、全国的発展を目指すとき、そこには公共機関からの援助があつてしかるべきである。自治体の場合、その援助のレベル、形態は様々であるが、日本の福祉の後進性は、国レベル、自治体レベルのスポーツ振興への公的援助（施設整備、組織育成、事業主催）でも未だ後進的である。

ママさんバレーという「社会的弱者」のスポーツ振興には一般以上の援助は必須であろう。

参考資料

- ・『ママさんバレー一〇年のあゆみ』全国家庭婦人バレーボール運営委員会、一九七九年一〇月。
- ・『ママさんバレー三〇年の歩み』全国家庭婦人バレーボール大会三〇周年記念誌、二〇〇〇年八月。
- ・『明るい輪 全国家庭婦人バレーボール連盟二〇周年記念誌』二〇〇〇年七月。
- ・全国家庭婦人バレーボール連盟でのインタビュー、二〇〇〇年八月二十五日。
- ・二〇〇〇年九月八日に浦和市民体育館での「浦和さつき会」へのインタビューと浦和市体育協会『創立三〇周年記念誌』同『二一世紀に向かって 速高強 創立五〇周年記念誌』を参照にした。

（一橋大学社会学研究科教授）